11月11日は介護の日

介護のこれからを見つめて

有限会社猫嫁　在宅福祉総合サポートセンターひだまり　代表取締役　水野小百合氏に聞く

平成十二年の施行から十年が経った介護保険制度。社会の変化に対応すべく改正が重ねられている中、厚生労働省が介護についての理解と認識を深めるために制定した「介護の日」は三年目を迎えた。今後さらに高齢化率が高まるわが国において、介護現場が抱える問題と今後の在り方は―。自らも現場で介護サービスに従事する水野小百合氏に話を聞いた。

―高齢者の介護を社会全体で支え合う介護保険制度が施行され十年が経ちました。介護を取り巻く社会環境はどう変化しましたか。

介護保険制度が制定されるまでは、老人福祉と老人医療が別々に存在しており、いずれのサービスも市町村や社会福祉協議会が行うのが通常でした。介護保険制度が施行されると、介護を取り巻く環境が少しずつ整備されていき、現在では介護の社会資源もとても多くなりました。

介護保険制度は、介護が必要な一人のお年寄りを、介護のプロがチームを作って支えるところに魅力があります。近年はケアマネージャーの資格更新の講習などで意識が高まり、介護現場の技術とマネジメント力が高まってきていると感じます。

平成二十一年からは三年の期限付きで、介護職員の処遇改善に取り組む事業者に対して「介護職員処遇改善交付金」が交付されるようになりました。介護の仕事は収入的な魅力が少なく、若い人が集まりにくい現状がありますが、この交付金は、若い人が介護職を目指してくれるような経済的整備や、誇りを持てるような社会的な地位向上の実現の一助になったと思いますので、制度の継続を望みます。また交付金の対象を、介護を陰で支える事務員や厨房スタッフなどにも広げていただきたいと思っています。

―近年、社会問題となっている老老介護について現状をお聞かせください。

制度の施行から十年で六十五歳以上のお年寄りの割合が高まり、介護する側のリスク、例えば精神的な負担や肉体的な衰えによる事故なども問題視されています。老老介護に直面している方からは、「体力的に限界」「施設に入れたいが空きがない」「費用がかかる」など、共倒れにならないような工夫が必要です。特に介護に不慣れな男性が要介護者の世話をするケースにおいては、心身共に疲れ果ててしまう方も少なくありません。力に訴えかける悲しい事件につながる例が見受けられますので、小さなシグナルを見落とさないように細心の注意を払ってください。

介護する高齢者の方はデイサービスやショートステイを利用して、その間はゆっくり心を切り替えて、体も休めるようにするなど、共倒れにならないような工夫が必要です。特に介護に不慣れな男性が要介護者の世話をするケースにおいては、心身共に疲れ果ててしまう方も少なくありません。力に訴えかける悲しい事件につながる例が見受けられますので、小さなシグナルを見落とさないように細心の注意を払ってください。

みずの・さゆり　介護支援専門員（ケアマネージャー）、介護福祉士。2002年、日本福祉大学大学院社会福祉学修士。高校１年生のころ、老人保健施設でアルバイトスタッフとして働いたことをきっかけに介護の仕事に。特別養護老人ホームで介護職として４年間勤めたのち、医療ソーシャルワーカーとして１年間勤務。その後、福祉系の専門学校で専任教員として教壇に立つ。02年３月、有限会社猫嫁 在宅福祉総合サポートセンターひだまり（名古屋市中区上前津二丁目５―25 ☎052-324-8872）設立。代表取締役に就任。

介護10年で大きく進化
改善策など継続拡大を

介護保険被保険者の介護を必要とする度合いを表す「介護度」において、中度・重度の方が増えています。それに核家族という要因が加わり、老老介護という社会問題が生まれました。老老介護の場は急務でしょう。

社会のニーズを把握
柔軟な介護を理想に

―水野代表が設立した在宅福祉総合サポートセンターひだまりのこれまでと現状を教えてください。

平成十四年、「お年寄りが本当に必要としている介護サービスを提供したい」との思いで、訪問介護と訪問入浴介護サービスを開始しました。やがて介護サービスの利用者が増えると、住宅型有料老人ホームとデイサービスセンターを増設しました。また、お年寄りだけではなく、より多くの人の支えになるべく、近年は障害者自立支援サービスにも力を入れ始めています。

―最後に水野代表が目指す介護のあり方についてお聞かせください。

介護保険制度の改正により、少しずつ介護を取り巻く環境は改善されてきていますが、依然、介護従事者が労働内容の厳しさに見合った報酬が得られない問題や、介護サービスの利用限度額により十分なサービスが受けられないという声が聞こえてきます。また不況の影響により、一割の自己負担が大きく響いている現状も見過ごせません。

私が理想だと考えるのは、ケアマネージャーを中心とした介護のプロフェッショナルが連携し、家庭ごとに最適な介護サービスが提供されること。私自身もニーズを的確にとらえ、高い技術を持ちながら、マニュアルのない柔軟な介護で進化を続けていきたいと思っています。